

## 岩手医科大学歯学会第32回例会抄録

日時：平成3年6月29日（土）午後1時30分

会場：岩手医科大学歯学部講堂

## 演題1. 全身麻酔下における歯科処置内容についての考察

○島津 聡子, 野坂久美子, 守口 修  
 駿河由利子, 辺見 夏樹, 印南 洋伸  
 佐藤 輝子, 小野 玲子, 甘利 英一  
 久慈 昭慶\*, 鹿内 理香\*, 城 茂治\*

岩手医科大学歯学部小児歯科学講座

岩手医科大学歯学部歯科麻酔学講座\*

全身麻酔下での治療の必要条件は、限られた時間内で、より多くの歯数を正確に行い、かつそれらが永続的なものであるということが、考えられる。今回は、1990年4月より、岩手医科大学歯学部歯科麻酔科発足から約1年間に行われた、小児歯科における歯科治療の内容と、その予後について報告した。

対象は、外来での取扱いが困難であったり、通院不可能な遠距離者で、3歳から23歳までの男児10名、女児13名の計23名である。症例の内分けは、精神神経障害（てんかん・精神発達遅滞・自閉症など）16名、Down症候群2名、Stürge-weber症候群、染色体3p症候群、網膜色素変性症が各々1名、健常者（歯科治療恐怖症）が2名である。全身麻酔方法は、GOS, GOF, GOI のいずれかで行われ、その際の合併症は5名に認められた。すなわち、体温上昇、気管支痙攣、分泌物の増加、退院後肺炎等であった。しかし、肺炎を除いては、いずれも当日あるいは翌日には改善した。通院は小児の安全確保のために、2泊3日がほとんどであった。口腔内所見では、1人平均齶蝕歯数が10.6歯であり、とくに乳歯では第二乳臼歯に、永久歯では第一大臼歯に多くの齶蝕が認められた。処置内容は、修復が大半を占め、中でもレジン充填が多く、次いで乳歯用既製冠やインレー、鑄造冠であった。また、抜歯は修復に次いで多かった。処置時間は、1人当たり25分から4時間35分で、平均2時間29分であった。経過年数と修復物の状態は、6ヵ月未満と1年以上のものにトラブルの発生が認められ、186歯の修復歯中5歯に脱落と破折が認められた。そのほとん

どが乳歯におけるレジン充填であった。また、予後をより良好にするためには、一回の処置にとらわれず、齶蝕の状態に応じた処置回数も必要と考えられた。

## 演題2. 粉末飼料飼育ラットにおける下顎枝内部構造の検討

添野 一樹

岩手医科大学歯学部歯科矯正学講座

不正咬合の増加に対する要因の一つとして、軟食化傾向による筋機能の低下と、それに伴った顎骨の成長発育との関連性が指摘されている。このことは、おもに実験動物の乾燥頭蓋骨あるいは頭部X線規格写真による形態的な変化として報告されている。本研究は、この点に関して特に顎骨の内部構造について検討を行った。

実験にはWistar系雄性ラットを用い、粉末飼料および、固形飼料で5週齢から9週齢までの成長期に相当する期間飼育をした。屠殺後、下顎孔を基準とした下顎枝前頭断面の非脱灰研磨切片を作製し、蛍光顕微鏡下で、下顎枝断面像を上部、中央部、および下部に分けて観察した。また、骨の構造については、それを構成する要素として、石灰化骨、類骨、低石灰化骨および、骨髓空隙に分類し、それぞれを画像解析装置（カールツァイス製IBAS-2000）によって面積を求め、全断面積に対する占有面積比を中心に検討した。

その結果、石灰化骨の面積比は、粉末食群では固形食群より下回る傾向が認められた。9週齢における上部、中央部、下部の石灰化骨は粉末食群が32%、57%、52%で、固形食群は39%、58%、42%であり、石灰化骨の形成量に影響があることが示唆された。類骨・低石灰化骨は、石灰化骨とは逆に、粉末食群が固形食群を上回っていた。9週齢では粉末食群は36%、12%、18%で、固形食群は21%、6%、17%であった。しかし類骨の形成量は光顕下において、固形食群に優勢に認められた。骨髓空隙の面積比は、両食群共に変動は小さかったが、固形食群の9週齢の構成比41%、

36%, 40% に対し, 粉末食群は 32%, 31%, 30% と少ない傾向が認められた。

骨の内部構造では, 粉末食群で, 骨形成の低下を認めるとともに, 骨髓空隙の占有比が下回るとは, 粉末食による機能の低下が, 骨の改造機転の低下として直接的に影響し, 骨髓空隙の減少となって現れ, 骨の吸収系にも影響を及ぼすことが示唆された。

### 演題3. 顎動脈走行異常の一例

○藤村 朗, 遠藤 哲彦, 会田 則夫  
大沢 得二, 野坂洋一郎

#### 岩手医科大学歯学部口腔解剖学第一講座

平成2年度解剖学実習のための日本人遺体22体44側中, 顎動脈が下歯槽神経と舌神経の間を走行する走行異常例が76歳女性の左側に出現した。

下顎枝の後方(下顎後窩)を上行する外顎動脈の終枝となる顎動脈は歯槽領域において重要な血管であり, 軟部人類学的見地からは人種の差異の認められる血管である。

本症例では, 顎動脈は下顎枝関節突起基底部の高さで起始し, 外側翼突筋下縁を前走していた。顎動脈は下顎枝部において, 下歯槽神経の内側を走行し, 次いで舌神経の外側を走行していた。このような走行形式は, 藤田の分類のD型に属するものであった。

顎動脈が下顎神経の枝にはさまれて走行する出現率は日本人では, 足立が0.3%, 藤田が1.7%, 宝田が0.8%, 猪鹿倉が0.6%, 貴島が0%, 竹村が0.9%, 岩本が0.6%と報告している。諸外国では Munro が2.0%, Lurje が3.5%, Lauber が5.7%と報告をしている。これらの報告は分類に多少の違いが見られるため, 単純に比較することはできないが, 欧米人では出現頻度が高いことが分かる。本学歯学部解剖学実習においてもこのような顎動脈の走行異常には初めて遭遇した。出現率は734側中1例(0.14%)であったが, 本症例は, 顎動脈の分岐位置が低く, 外側翼突筋下頭の下縁を走行しており, 正確な意味においては外側翼突筋の内側を走行しているとは言えない。このような顎動脈の走行異常に関しては胎生期の血管の吻合の形成, その後に続く消失の過程における違いであると理解されている(D.H.Padget 1948)が, 人種差が著明である理由付けはなされていない。しかしながら, 歯科臨床, 特に口腔外科の手術で, 翼口蓋窩に及ぶ場合に, 術者はこのような顎動脈の走行異常がありうることに

注意する必要があると考える。

### 演題4. 我国における舌癌剖検症例

—日本病理剖検輯報による1987年度の集計—

○佐藤 方信, 大津 匡志, 大島 忍  
吉村 法子, 鈴木 鍾美

#### 岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

我国における舌癌症例の実態の解明を目的に1987年に剖検された舌癌症例を日本病理剖検輯報から収集して種々の観点から検討した。

1987年に我国において剖検された総症例数(新生児, 死産児および検討中の症例は除く)は37,331例(男23,422 女13,868, 不明41)で, このうち悪性腫瘍の剖検症例数は23,312例(男15,238 女8,058, 不明16)であり, 舌癌剖検症例数はこのうちの92例(男68, 女24, 平均年齢63.2±12.6歳)であった。人口動態統計(厚生省)における舌の悪性新生物による死亡率から見た舌癌症例の剖検率は15.5%であった。舌癌剖検症例を年代別にみると50歳代が24例, 60歳代が29例であり, これらの年代の症例を合わせると舌癌症例の57.6%と半数以上になっていた。発生部位(64例で記載なし)では舌(側)縁が19例(67.9%), 舌根部が6例(21.4%), 舌下面が2例(7.2%), 舌尖部が1例(3.5%)であった。左右別(63例で記載なし)では左側が13例(44.8%), 右側が16例(55.2%)で右側に発生した症例がやや多かった。組織学的には80例(96.4%)が扁平上皮癌で, 組織学的分化度別には高分化型が多かった。舌癌に他の臓器の癌を合併した多重癌症例が19例(20.7%, 平均年齢68.0±8.9歳)(二重癌13例, 三重癌5例, 四重癌1例)であった。臓器別の転移では, 肺・気管・気管支(42例, 45.7%), 骨・骨髓(19例, 20.7%), 肋膜・胸腔・胸壁(18例, 19.6%), 皮膚・皮下組織(17例, 18.5%), 甲状腺(15例, 16.3%)などが多く, リンパ節では頸部(26例, 28.3%), 肺・肺門(15例, 16.3%), 喉頭・食道気管周囲(13例, 14.1%)などへ転移している症例が多かった。死因となった副病変では肺の感染症が最も多かった。

### 演題5. 両側陳旧性関節突起骨折に対する下顎頭付チタニウムプレートによる関節置換術

○檀上 達, 大屋 高德, 小早川隆文